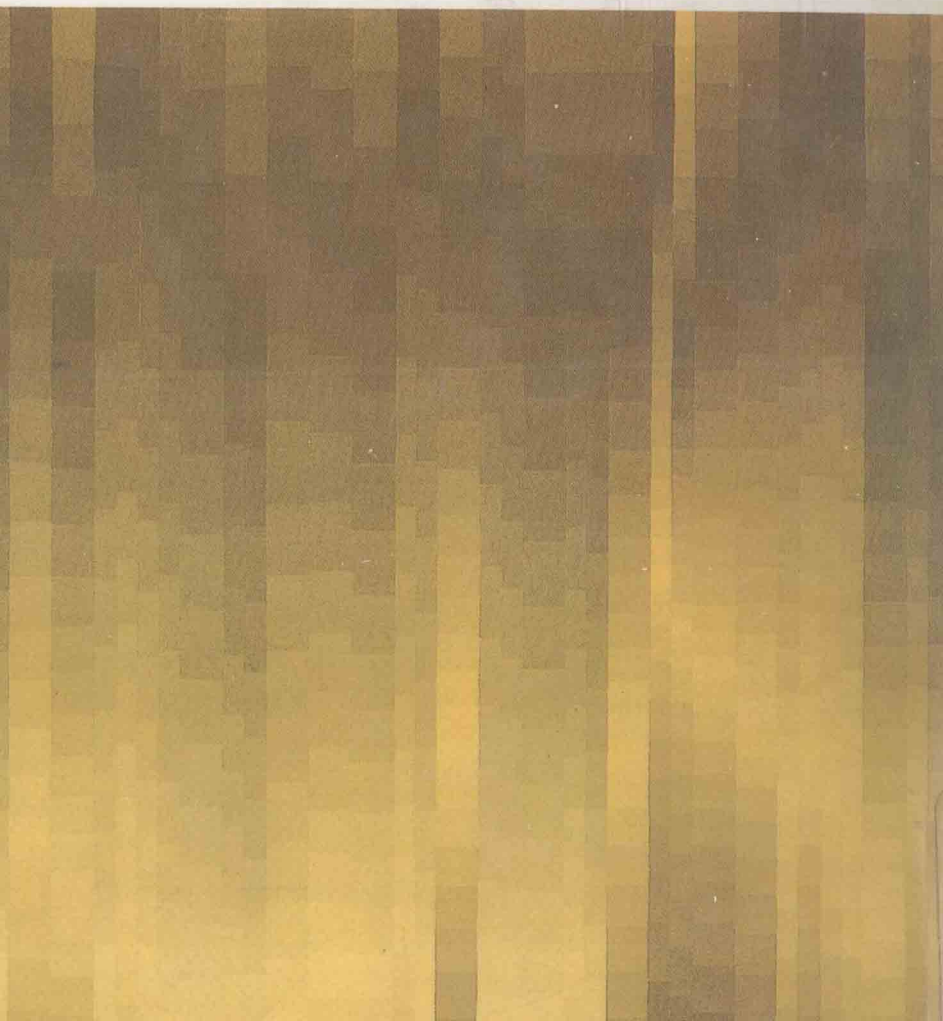


アルバート街の子供たち

アナトーリー・リュバコフ 長島七穂訳

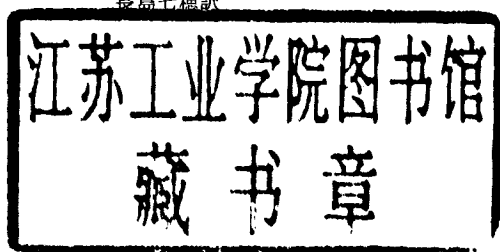
2



アナトーリー・ルィバコフ

アルバート街の子供たち

長島七穂訳



みすず書房

アナトーリー・リュバコフ
アルバート街の子供たち 2
長島七穂訳

1990年 5 月20日 印刷
1990年 5 月31日 発行

発行者 小熊勇次
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷 3 丁目17-15
電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京 0-195132
本文印刷所 平文社
扉・表紙・カバー印刷所 栗田印刷
製本所 鈴木製本所

© 1990 in Japan by Misuzu Shobo
Printed in Japan
ISBN 4-622-04540-0
落丁・乱丁本はお取替えいたします

第二部 (つづき)

それはまだ春のことだった。大学の卒業を目前にひかえたシャロックに、マリコーヴァから電話がかかり、翌朝、司法人民委員部の人事課へ来るように告げられた。

つまり、問題は片付いたのだ。工場ということにでもなれば最高だし、裁判所か検事局というのであれば、それはもちろんモスクワというわけだ。そうでなければ人民委員部に呼び出されるはずがない。大学では皆すでに辞令を受け取り、地方へ追いやられることになっていた。

翌日、指定の時間にユーリーはマリコーヴァを訪れた。彼女は彼が現われると立ちあがり、無愛想に「行

12

きましよう」と言った。

彼は、小さながらんとした、壁がむき出しの部屋に案内された。そこには、インクのしみの付いた緑色の紙でおおわれた、脇引き出しのない、使い古された事務机がひとつと、椅子が三脚あるだけだった。天井からは電線で裸電球が吊り下げられていた。この放ったらかしの部屋は、いったいなにに使われるのかわけがわからなかった。

もう長いこと磨かれたことのない汚れたガラス窓のわきに、小柄な男が立っていた。彼らが部屋に入ったとき、彼は振り向いた。マリコーヴァはシャロックを通すと、ドアをびったり閉めてすぐに出ていった。

しばらくのあいだ、ふたりは互いに見つめあった。男の無表情な童顔に、大きな角ばった眼鏡が不自然な大人っぽさを与えていた。ユーリーは、こういうむつつりした、ひ弱で、執念深い、ねちねちした連中をいつも敬遠してきた。この男は、デイヤークフですと名乗ると、ユーリーに椅子をすすめ、自分もユーリーの向かい合わせに腰をおろした。

「シャロック同志は大学を卒えられるところですね」

とデイヤークopfが口を切った。「就職の斡旋を間近に控えたところで、もっとあなたのことを知りたいのです。自分のことを話してください」

まあマリコーヴァが自分に会ったときも、これとそっくり同じことを言っていた。人事課の職員というのは、あまり独創性がないらしい。シャロークもデイヤークopfに向かつて、マリコーヴァに答えたとおりのことをそのまま繰り返した。縫製工場の労働者の息子で、過去にはフライス工として働いていた、大学ではこれこれの社会活動をした。厄介な問題もあって、兄は窃盗罪で服役中である、と。要するに、自分の体面を傷つけないように、しかし同時に、裁判所や検事局関係の仕事には不適格であることを印象づけるような答え方をした。工場に送りこんでくれるといいのだが。

しかしマリコーヴァと違って、デイヤークopfは兄のことでお説教を垂れなかった。どうやら、そのことはすでに知っているらしい。その代わりほかのことを詳しく問い質した。両親はこの出身か、親戚にはどういう人たちがいて、どこに住んでいるのか、シャローク一家はどういうアパートに住んでいるのか。そして

ついに、大学卒業後の志望は、と尋ねた。

「工場へもどりたいと思っています」

デイヤークopfは、共感を表わして首を振った。

「わたしの役目は、あなたの意向をはっきりさせることで、ほかのことを決めるのは上のほうなのです。またお電話します」

つまり、司法人民委員部か検事局に採用したがっているのは明らかだが、仕事の内容はどういうものなのかはつきりしない。卒業生全体のなかから選ばれたというのは、もちろん悪い気はしないが、自分の計画が崩されてしまう。そこで、人民委員部や検事局はモスクワを意味するが、それでも彼は工場に任命されるよう頑張ろうと決意した。

数日後にデイヤークopfから電話があつて、司法人民委員部へ出向くと言われた。ユーリーは出かけていった。デイヤークopfは通行証発給事務室で彼を待っていた。エレベーターでふたりは四階にのぼり、前回デイヤークopfが彼と面接したのと同じ部屋へ入っていった。

四つの高級将校の菱形階級章を軍服の襟章につけた

でつぷりした男が、窓際に座って新聞を読んでいた。襟章が深紅色ということは、合同国家保安部隊ということだ。ユーリーは縮み上がった。どういう仕事に採用しようとしているのかピンと来たからだった。

「ベリョージン同志です」とディヤークフが告げた。

新聞を下げたので、赤銅色のエスキモー風のベリョージンの顔がユーリーの眼に入り、彼はまた不安を感じた。

ベリョージンは手で合図してユーリーに椅子をすすめた。

ディヤークフは立ったままで、話し合いに移り、ベリョージンが顎をしゃくって椅子を示してはじめて腰をおろした。

ベリョージンは無言のままユーリーにじっと眼を注いでから、ゆっくりと切りだした。

「党組織が内務人民委員部機関の仕事にあなたを推薦しているのです。わたしはあなたの個人調査書類に眼を通しました。あなたのお兄さんは刑事犯ということですが、お兄さんと一緒に裁判にかけられた人たちは、お知り合いましたか？」

「ぼくは裁判ではじめて彼らに会いました」

「あなたはお兄さんとは仲良くしていたのですか？」

「兄とは四歳違いです。兄には兄の、ぼくにはぼくの、それぞれ別々の友達がいました」

「あなたはお兄さんと手紙にやりとりをしていますか？」

「兄は父や母に手紙を出しています……。両親は返事を書いています……。刑期をきちんと終えて、まっとうな勤労生活に復帰するようにというぼくの願いを両親は伝えていきます。そうした助言が効き目があるかどうかはわかりませんが」

ベリョージンの関心は兄にあるのではなくて、ユーリー自身にあることを彼ははっきりと意識していた。それゆえ、自分の誠意に疑問を抱かれないように、しかし、この機関に採用されないように答えなくてはならない。彼らの方で断わるべきなのだ。ベリョージンは、ブジャーギンと同じように、鉄の革命家集団の一員であり、自分のことなど絶対に信用しないだろう。「あなたにはどういう友達がいますか？」とベリョージンがきいた。

「とくに親しい友人はいません」と、これこそが重要な質問なのだということをまたもや意識しながら、シャロックは慎重に口を開いた。しかしペリョージンが聞き出そうとしているのはだれのことなのか？ サーシャ・パンクラトフのことなのか、それともレーナ・ブジャギナのことなのか？ ……サーシャにしろ、レーナにしろ、もうずっとまえから自分の友人ではなくなっている……。とくに親しい友人はいません」とシャロックは繰り返した。「知人なら、大学とか、ぼくの通っていた学校とか、家の近所とかにいますか？」

「あなたは第七学校に通っていたのですか？」

これではつきりしたぞ……。サーシャかレーナのことを聞いているのだ。

「ええ、第七学校です」

「クリヴオアルバーツキー横町にある？」

「ええ」

「いい学校ですね。学校時代の友達のなかでは、だれと会っていますか？」

だんだん話の矛先をサーシャ・パンクラトフに向けてきたな。黙っているべきか？ でもその必要があ

るのだろうか？ いずれにしても、あちらは知っているのだから。それにサーシャとつきあっていたからといって、どういう罪になるのだ？ 友情なんてものはまったくなくて、その反対に犬猿の仲だったのだ。しかし、それも言わない方がいい。逮捕された者をけなしていると思われるだけだから。なにもなかった、友情も、敵対関係も、ということにしよう。同じアパートに住み、同い年で、ということは同じ学校で学び、その後同じ工場で働いていたが、それはみなもうずっと前のことだ……。

「そうですか」と彼はひとこと、ひとこと言葉をよく選びながら言った。「ぼくたちはもう会っていないというのが、本当のところですよ。以前は会っていたといつても、同じアパートに住んでいるので、たまたま顔を合わせていたというだけのことです。でもいまでは、みなばらばらになってしまいました。たとえば、マクシム・コスチンは軍学校を出て極東へ行っていましたし、パンクラトフは、どういう件なのか、じつは知りませんが、逮捕されてしまいましたし、ニーナ・イワノワは、学校の教師をしていて、内庭で

ときどきすれ違つて、挨拶を交わす程度ですし……。

それから、ワディム・マラセーヴィチは、同じアパートではありませんが、アルバートに住んでいて、ときどき会っています。彼は人文関係で……。そのほかにはだれがいましたっけ？ 第五館に住んでいるレーナ・ブジャーギナがいますが、やはりほとんど会っていません」

「イワン・グリゴリエヴィチ氏の娘さんですか？」

とペリョージンは尋ねた。

「そうです」

「あなたには許嫁とかガールフレンドはいますか？」

レーナのことを言つたすぐあと、こういう質問を積み掛けてくるところを見ると、彼らは自分のことをよく知っているらしい。しかし彼らは知つていて当然なのだ。それに、こうした質問は、自分の生活を詳しく知るためというより、正直かどうかを験すためのものだ。「いまのところはまだ結婚する気はありません」とユリーにはこつとした。

「観劇や映画鑑賞やダンスが好きなのですね……」

レーナとレストランへ行つていたことも知つてい

のだ。

「ダンスは好きです」

「きれいな女の子たちと？」

「それはきれいな方がいいです」

ペリョージンはしばらく口をつぐんでから、尋ねた。「パンクラートフと言われましたが、それはアレクサンドル・パーヴロヴィチ・パンクラートフのことですか？」

「そうです。ぼくたちはただサーシャと呼んでいましたが。彼はぼくたちの学校のコムソモール細胞の書記をしていました。でも逮捕されてしまつて……」

「彼はどういう人ですか？」

シャロークは肩をすくめた。

「もうずっと前のことで、八年たちました。あのころの彼は、いいやつだったように思いますし、誠実で」と彼は微笑んだ。「コムソモールの指導者でした。ですが、その後なにがあつたのか知りません」

そうとしか彼には答えようがなかった。否定的な評価は無論のこと、控えめな評価でさえも、彼には答えられないような、また答えてもしかたがないような質

間を誘発することになるだけだ。あのころは、パンクライトフはいい少年で、あのころはサーシャは十五歳で、やはり十五だったシャロークは、あのころはすべてを少年らしい疑うことを知らない眼で見ていたのだ。いまでも信じやすく、あけっぴろげで、率直な自分のような者が、しかも刑事犯の兄がいるような人間が、彼らに必要だとは思われない。

シャロークは、サーシャ・パンクライトフに関して、自分がこういう「誠実」で、いい評価をしたことが、まさに自分の運命を決めたのだ、とは思ってもよらなかった。ベリョージンは、サーシャを見る眼と同じ眼でシャロークを見、サーシャがそうであるように、シャロークのことも、いい、正直な青年だと思った。このとんでもない思い違いは、その後ベリョージンにとつて高くつくことになった。

しかし、目下は彼はこう言った。

「われわれは、あなたが適任であるかどうか、よく検討してみます。でも、まずあなた自身に、ここで働く気があるのかないのか、はつきりさせていたただかなくはなりません。チェーカーで働くのは、たいへん名

誉なことです。党の武装部隊ですからね。われわれは無理やり押しつけるわけではありませんから、断わられても気を悪くしたりはしませんよ」

彼はまたデイヤークフに振り向いた。

「シャローク同志にあなたの電話番号を教えてあげてください」

「承知しました」とデイヤークフはちよつと腰を浮かせた。

「この問題はまだ決まったわけではありませんから」とベリョージンは言った。「この話はここだけのことにしておきましょう」

「ええ、わかりました」とシャロークは答えた。

なぜこの自分を選んだのだろう？ 自分は、優等生などではなしに、並みの学生だ。社会活動家としてもたいしたことはなく、与えられた任務を遂行してきたに過ぎない。どうやらこういう凡庸な人物が必要とされているらしい。

彼は、自分に関して彼らがどんなことを言うか想像してみようとした。ベリョージンは疑問を抱くだろう。

なぜ兄が刑事犯なのか？ なぜレストラン通いをするのか？ きつとあの刑事犯の兄も、ぜいたくな暮らしが好きで、それで宝石店泥棒などしたのだろう。なぜこんな男を採用しなくてはならないのか？ しかしディヤークはシャロックの肩を持つことだろう。候補者として彼に目を付けたディヤークは、自分の選択の正しかったことを主張するだろう。なにか相互理解とでもいうようなものが、ふたりの胸中をかすめたのだ。彼とならユリーはうまくやっていけそうだが、ペリョーシンとは……。

「お父さんと競馬に行くことはありますか？」

「いいえ」

この質問がユリーにはもつとも不愉快に感じられた。彼らは自分のことをなんでも知っているのだ、それのことでもなにからなまでに知っているのだ。それなのにいつも自分はブジャーギンを恐れていた。恐るべきはブジャーギンではなくて、ペリョーシンなのだ。ブジャーギンは有名で、ペリョーシンはそうではないが、ペリョーシンこそ隠然たる勢力を持っているのだ。秘密の権力を握っているペリョーシンのような人びと

は、目に見える権力を持っている人びとを背後から操っているのだ。

そしてディヤークも、ペリョーシンに話し掛けられるたびに起立していたとはいえ、やはり権力を握っているのだ。ユリーは、彼とはじめて会ったときにディヤークが椅子にどっしりと腰をおろしたことを思い出した。彼が大学で探していたのは、あまり出来の良くない学生などではない。そんな連中は彼らには用はないのだ。ディヤークは、シャロックに白羽の矢を立てたのだ。このシャロックは、お人好しのマクシム・コスチンでもなければ、意気地なしのインテリクスのワディム・マラセーヴィチでもなく、あまりにも自律的なサーシャ・パンクラトフでもなく、まさにこうした仕事にうってつけの人物なのだ。だれもシャロックの手に掛かったら逃れることはできないだろうし、だれにも言い逃れは許さない。自分は正直な人があるなどとは思っていないのだ。この国の掲げる理想を心から信じることなどできないし、信じていると言う者

* ソ連の非常委員会に始まる特別警察の総称

がいるとしたら、嘘をついているのだ。

そういうことなのだ。これは正しい決定だ。こうした以上は運を天にまかせるほかない。自分は同意するが、あとは向こうで決めてもらうまでだ。あちらに採用する気があれば採用されるし、その気がなければ採用されないというだけのことだ。あそこに入れば、身の安全は保証される。あの連中は、人びとの運命の決定権を握っているのだから。

ユーリーはディヤークフに電話して、採用されることに異存はないと伝えた。

「夕方こちらへ来てください」とディヤークフは言った。

通行証を手にはユーリーは事務室の番号札を見ながら長い廊下を歩いていった。本当にここで働くことになるのだろうか？

ディヤークフがユーリーに応対したのは、小さな部屋だったが、それは彼の執務室で、ディヤークフは主人顔で座っていた。軍服姿で、詰襟の襟章に三つの長細い階級章をつけていた。妙なことに、軍服は彼に似合って、その貧弱な身体は堂々として見えた。

「正しい決定をしたね」

彼はユーリーに向かつてくだけた口のきき方をし、同僚扱いをして愛想よくしゃべり、机の引き出しからファイルを取り出した。

「きみの関係書類だ。書類の作成をしなくては」

ユーリーは、彼に気に入られているのを感じた。

「ね、シャローク君」とディヤークフは言った。「このまえきみはパンクラトフのことを言っていたが、彼はどのようなやつなんだ？」

「そうですね」とユーリーは肩をすばめた。「まえにも言ったとおりで……。学校ではコムソモール細胞の書記をしていました。あのころの彼は正直な人間という印象を与えてました。彼の欠点をあえて言えば、だれよりも利口で、知識があつて、情報に通じているふりをしていたということでしょうか」

「彼は本当に情報通だったんではないかな？」

「そうかもしれませんが」とユーリーは同意した。彼は事情が飲み込めて、なにを話すべきなのかいまや自覚していた。「彼の叔父さんのリャザーノフは、工場建設の立て役者です。そもそもぼくの学校には、お偉方の

子弟がたくさん通ってました。パンクラトフはよく彼らの家に行っていました。彼は、言うなれば、命令を下すリーダー格でいたがっていたのだと思います」「そうそう、その通りだ」とディヤークフは真面目に言った。「それで余計なことをやらかしたのだ。自分のことも、正直な奴らのことも、巻き添えにして」「なんでも、壁新聞を発刊したとか?」

「そういうこともしたし、別のことにも関係して……。彼はどういってお偉方の家に入りにしていたのかね?」

明らかにブジャギンに関心を持っているのだが、偉すぎるので、その名を挙げるのは憚られるのだ。ユーリーもその名を挙げるようなことはすまい。そのような情報は自分から流すものか。ペリョージンとの話のなかで、すでにレーナのことを言ったのだから、それでもうたくさんだ。

「ぼくたちの学校には第五館の連中がいて、よく彼らのところへ行っていました」

ディヤークフはシャロークをちらつと横目で見た。

「調査用紙に記入して、履歴を書いてくれ」。そして快活にこう付け加えた。「きみとはうまくやっていたけそ

うな気がするな」

ユーリーはすぐに新しい環境に順応して、この機関に馴染んだだけでなく、その若さと、愛想の良い笑顔と、年とともにどことなくスカンジナビア風な端正さの加わった、あけっぴろげなロシア人的な顔で職場を明るくした。均整の取れた身体つき、敏捷さに加えて、頭の回転が早く、てきぱきとして、節度もあるところが、ディヤークフとペリョージンに買われたのだった。

ペリョージンの後ろ盾は、ユーリーの早い出世を約束していたが、彼はディヤークフを恐れて後押しされるのを迷惑に感じていた。ペリョージンは上の方にいて、何週間もユーリーに会わず、彼の目のまえにユーリーが現われた時だけ、その存在を思い出すようなものだった。ディヤークフはすぐわきにいて、いつ何時未經験を盾にとって、ユーリーを痛め付けるかもしれない。ペリョージンはひとりだが、ディヤークフのような連中は掃いて捨てるほどいる。それにディヤークフの官僚的な底意地の悪さですら、ペリョージンの真正直さよりもユーリーには親しみが持てた。ペリョージンは信念を持っていたが、ユーリーはなにもものも信

じていなかった。ディヤークフは信じているような振りをしていた。

だが、ディヤークフに対しては油断は禁物だ、彼は策士だということをシャロークは素早く見抜いて、警戒していた。ディヤークフは、自分の担当してきた人びとを幾人か彼に引き渡したが、そのなかにはヴィーカ・マラセーヴィチもいた。

まったくとんだ贈り物だ！ こんなことになろうとは思ってもよらなかった。ということは、ヴィーカが……。ディヤークフはたまたま彼女を引き継がせたのか、それともふたりの関係をなにか知っていてそうしたのだろうか？

念のためにシャロークはこう言った。

「ぼくはこのヴィーカ・マラセーヴィチを知っています。同じ学校にいたんです。彼女の兄弟と同じクラスで、彼女は一学年上だったか、下だったか、もう憶えていませんが」

しかしディヤークフはそんなことは知っているのか知らないのか、顔色ひとつ変えずに落ち着きはらって説明した。

「この令嬢は外国人とつきあっているの、情報提供者にしたんだ。記録を見てもらえればわかる。彼女の父親のマラセーヴィチ教授のもとにはグリンスキーが出入りしていて、その彼について情報をもらわなければならない。マロセイカ通りで彼女と面接してくれ。彼女の来る日は、火曜日、十一時だ。遅れずにきっかり来ているよ」

ディヤークフの言うとおり、ヴィーカは十一時ちょうどに現われた。ユーリーは彼女のためにドアを開けた。シャロークを見ると、ヴィーカはエレベーターの方に後退りした。彼女はユーリーが内務人民委員部で働いていることは知っていたが、まさか自分の担当になろうとは思ってもみなかったのだ。

「さあ、さあ、お入りなさい、遠慮しないで」とユーリーはにつこりした。「しばらくぶりだったね」

軍服を着たすらりとしたハンサムな彼は、彼女を部屋に通し、礼儀正しく椅子をすすめた。彼の身につけているベルトも、詰襟の階級章も、長靴も、なにもかも新品で、きらきらと光り輝いていた。彼は力と権威と成功の権化として、彼女と愛想よく、快活にすら話

し、あたかも彼女の役割にはなにも特別なものはないし、彼らがこうした状況で会っていることにも、特別のものはない、といった調子だった。

しかし、次の面談にヴィーカがローネックの、ヒップのぴったりした夏のドレスを着て現われ、器用な手つきで肩紐をずらして、白くて丸い肩をあらわにしたとき、ユーリーはそれに冷たい視線を滑らせると、彼女の眼を真っすぐに見つめながら、こう言った。

「ぼくたちは同じ学校に通っていて、休み時間にこっそりとキスしたからといって、だれもそんなことには興味はないんだ。それ以上のことは、われわれの間にはなかったんだ。そうだろう？」

彼女は肩紐をもとにもどすと、まごまごしてつぶやいた。

「ええ、ええ、そうだわ」

デイヤークフがヴィーカを仕事に引き入れたのは、ロミナツゼの件からんで、マラセーヴィチ教授の家庭の事情に立ち入らざるを得なかったからだった。

ロミナツゼの共犯者のグリンスキーは、同郷人だが、親類だとかいうことでマラセーヴィチ家に入入りし、

そこで外国人たちと会っていた。その外国人たちを通じて、外国の共産党におけるロミナツゼの同調者と秘密の結びつきを持っても、なんの不思議もあるまい？

一見突飛なこうした構想から、ひとつのシナリオが生み出され、あやふやなチェルの供述に確実性を与え、コミンテルンとは直接的に関係のない人びとの名前を持ち出してその裏付けとし、こうした間接的な結びつきによって事件は広がりと思憑性を得ることになる。

どんな事実も、ヴィーカの取るに足らぬ供述でさえも、それをシナリオと結びつけることができれば、重みのある重大なものとなり、グリンスキーの名前のわきに、チェルがロミナツゼの密使として思い出すに相違ない人びとの名前が並ぶことになる。それと同時に、グリンスキーの妻は、大学の学長であり、そこには副学長のクリヴォルーチコが率いるトロツキストの地下組織が存在していたというわけだった。

シャロークは学校時代からグリンスキーの息子のヤンを知っていた。その父親のレーニンの思い出を講演会で聞いたことがあるし、その母親の威厳のある女史を見かけたこともある。彼女はその後サーシャ・パン

クラートフが学んでいた大学の学長になり、ちなみにこの彼女がサーシャを退学させたのだった。このばかな女性には、サーシャの件がいずれば彼女の夫の件に関連づけられ、さらには彼女自身も巻き込まれていくことを悟っていないのだ。

これがいまシャロークの担当となったのだ。

この新しい世界で、知人の名前に出会うことによって、彼は過去と現在のつながりを見出せるようになった。シャロークは、はじめて、これまでに彼を侮辱し、見下してきた人びとに対する報復の時がいよいよ到来したのだと実感することができた。サーシャ・パンクラートフは、シャロークからではないが、すでにその報いを受けた。そしてほかの連中も報いを受けることになるのだ。

13

ユーリーがヴィーカと面会していたアパートは、デイヤークフのもので、デイヤークフ自身は妻のレベッカ・サモイロヴナのアパートに住んでいた。レベッカは太った、身体が一方に傾いた、びっくりするほどの不美人であったが、政治的な教養があり、経済学の教師をしていた。彼女のおかげでデイヤークフも政治的な教養を身につけられたのだった。もっともシャロークの見るところ、彼が読んでいるのはスターリンの『レーニン主義の諸問題』だけのようなであった。

シャロークはレベッカを嫌っていた。じつを言えば、総じて彼はユダヤ人というものが嫌いだった。アパートでも、学校でも、だれもユダヤ人とそうでない人を